

ホモ・サピエンスの拡散・定着期における文化動態 —南ヨルダン、カルハ山の旧石器遺跡調査(2022年)—

門脇 誠二 名古屋大学博物館教授
 廣瀬 允人 木曽広域連合埋蔵文化財調査室調査員
 須賀 永帰 名古屋大学環境学研究科博士後期課程
 殷 健杰 名古屋大学環境学研究科博士前期課程
 木元菜奈子 名古屋大学環境学研究科博士前期課程
 オダイ・タラウネ ヨルダン考古庁研究員
 ドナルド・ヘンリー タルサ大学人類学科名誉教授

Cultural Dynamism during the Geographic Expansion of *Homo sapiens*: The 2022 Season of the Palaeolithic Investigation in the Jebel Qalkha, Southern Jordan

KADOWAKI, Seiji Professor, Nagoya University Museum, Nagoya University
 HIROSE, Masato Researcher, Laboratory of Archaeology, Kiso Regional Union
 SUGA, Eiki Doctoral student, Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University
 YIN, Jianjie Master student, Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University
 KIMOTO, Nanako Master student, Graduate School of Environmental Studies, Nagoya University
 TARAWNEH, Odai Researcher, Department of Antiquities of Jordan
 HENRY, Donald Professor Emeritus, Department of Anthropology, The University of Tulsa

1. はじめに

現存する唯一の人類である私達ホモ・サピエンスは30万～20万年前にアフリカで出現した。その後ユー

ラシアへ拡散した拠点となった地域が西アジアである。西アジアでも地中海東岸域のレヴァント地方には19万年前からホモ・サピエンスがいたが、ユーラシアへ広域拡散したのは5万～4万年前である。ホモ・サピエンスは、ユーラシアの拡散先にいた旧人(ネアンデルタール人やデニソワ人)と交雑することもあったが、4万年前頃までに旧人は絶滅した。

この人類進化史の画期の一端を明らかにするために、レヴァント地方南部のヨルダン国において旧石器時代(特に8万～1万5千年前)の遺跡調査を2016年から行っている(図1、門脇ほか2022)。新型コロナ禍のために2020～2021年は現地調査を中止したが、2022年8月末～9月中旬に再開することができた。その概要について下記に報告する。

2. トール・マハラス遺跡の発掘

トール・マハラス(Tor Makharas)は、カルハ山の中央部付近に位置する岩陰の1つである(図2)。岩陰前の斜面に石器が散布していることを2019年の調査で発見した。表採された石刃や小石刃は、側縁形態がやや不規則であり打面の頭部調整もやや粗い特徴が認められたため、小石刃技術の初期を示す貴重な資料

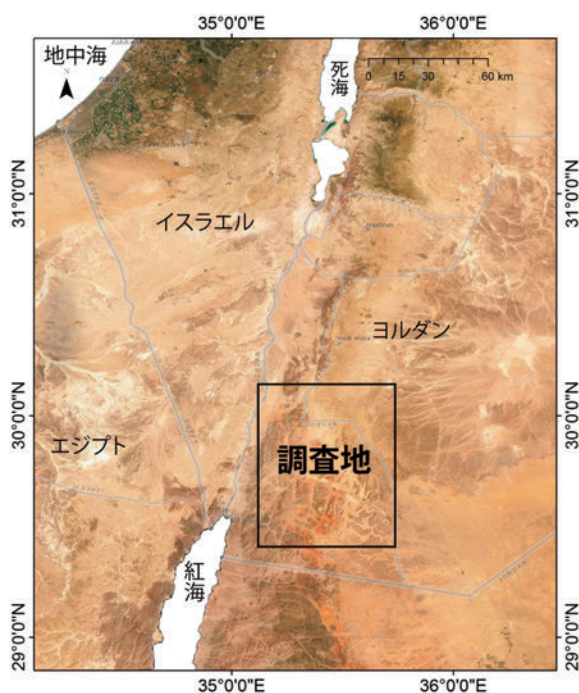


図1 ヨルダン国南部の調査地の位置



図2 トール・マハラス岩陰とトール・ハマル岩陰の遠景

(上部旧石器初期から前期への移行期)かもしれないと判断した。

岩陰前のテラス斜面を侵食した溝に土層断面が露出していたので、その清掃を行い、溝の底に1m×1mの試掘区を2か所に設けた。その結果、約1mほどの堆積があることを確認したが、石器は地表近くにしか含まれていないことが分かった。その下の堆積物は大小さまざまなサイズの角礫や円礫を含み、ラミナが見られる部分もある。こうした点から、この堆積は斜面上部の崖から雨水によって運ばれてきた礫や土砂の二次堆積であると考えられる。また、期待していた上部旧石器ではなく続旧石器時代の石器も混在していたため、発掘をすぐに中止した。

3. トール・ハマル遺跡の発掘

トール・ハマル(Tor Hamar)遺跡は、トール・マハラスの南東80mに位置する(図2)。岩陰下に厚さ2mほどの堆積があり、2016年から再調査を継続している。これまでの調査で、A～E1層が続旧石器中期(1万5千年前頃)、E2層が続旧石器前期(2万4千年前～1万8千年前)、F～H層が上部旧石器前期(4万3千年前～3万年前)と明らかにした(Naito et al. 2022)。今年は、さらにその下に文化層があるかどうかを確かめるため掘り下げを行った。

H層よりも下は、砂岩の角礫を含む非常にしまりが強い堆積で、遺物はほぼ含まれなかった。これをI層とした(厚さ10～15cm)。その下に、ややしまりの弱い砂の堆積があったが、やはり遺物は含まれなかつ

た(J層、厚さ10cm)。そして、その下に砂岩の岩盤が現れたため、発掘を中止した。この結果から、本遺跡は上部旧石器前期から居住され始めたことが明らかになった。その開始年代を確かめるため、H層とI層からOSL年代測定サンプルを採取した。

4. トール・サビハ遺跡の発掘

トール・サビハ(Tor Sabiha)遺跡は、カルハ山から10kmほど東に位置するエル・ジル山(Jebel el-Jill)の麓に開口する岩陰である(図3)。以前の調査により、中部旧石器後期の遺跡として知られている(Henry 1995)。2019年に再調査を開始して、岩陰内1か所とテラス4か所に発掘区を設け、中部旧石器後期の文化層を検出した。今年は、石器以外に骨も比較的良く保存されていた岩陰内の発掘区(Unit 105)を1m×2mの範囲で拡張した(Unit 106と107)。

岩陰内には4mほどの堆積物があり、そのほとんど(約3.5m)は6,500年前以降の堆積物である。遺物はわずかで、数点の石器と動物骨、炭化植物が採取された。放牧活動による岩陰利用の跡と考えられる。その下に白色の砂層(約50cm)があり、その中から中部旧石器の石器が採取された(図4)。遺物の分布密度は低い、完形のルヴァロワ剥片や石核の比率が高く、チップがほとんど含まれないのが特徴である。また、予想通り動物骨の保存も良く、ウマ属やヤギ属、ガゼルのほか、げっ歯類やカメの遺存体が見つかった。この同定はMiriam Belmaker准教授(タルサ大学)と共著者(廣瀬允人)が行った。当時のレヴァント地方には、



図3 トール・サビハ岩陰(左)、岩陰内部の発掘区(右)

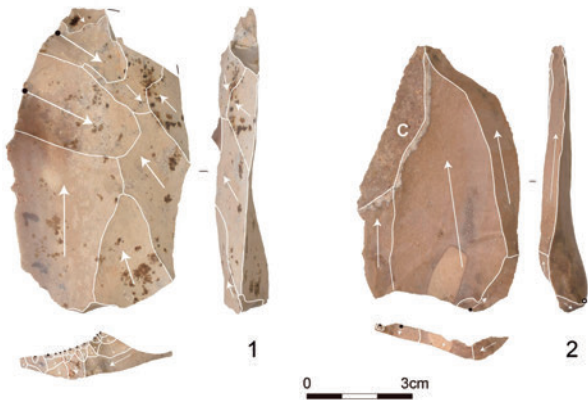


図4 トール・サビハ岩陰出土の中部旧石器資料(ルヴァロフ剥片)

ネアンデルタール人とホモ・サピエンスのどちらもいた可能性があるが、その時代の狩猟活動や自然環境に関する貴重な記録になると期待される。

5. 石器石材の産地調査

南ヨルダンのカルハ山付近は、打製石器に適した岩石の産出が限られている。そのため、石器時代の人々は15 km 以上離れた地域から石材をたくさん持ってきたと考えられていた(Henry 1995)。しかし、カルハ山近郊における2019年の踏査の結果、遺跡から8 km 圏内に幾つかの小規模なチャート産地(露頭や礫層)を発見した(Ichinose et al. 2022)。2022年度も東田和弘准教授(名古屋大学博物館)と共著者(須賀永帰)が中心となってチャート産地の調査を継続した。

その結果、カルハ山から南西方向へ9~11 km の範囲にもチャートの露頭が分布することが確かめられた(図5: Wadi Abu Sawwan の南)。ヨルダン地質図で、白亜紀後期の Amman Silicified Limestone 層と始新



図5 カルハ山南方の丘陵に露出するチャート(Wadi Abu Sawwan 南)

世の Umm Rijam Chert Limestone 層が記されている場所である。また、カルハ山から北東へ10~15 km のマール・アン・台地縁辺の踏査も行った。この一帯の地質図は未刊であるが、チャートの露頭が広く分布していることを新たに検出した。いずれのチャート産地でも旧石器時代の石器が散布していたので、実際に旧石器時代の人々が訪れていたと考えられる。

6. 水場と鳥罫猟の民族調査

カルハ山域に旧石器時代の遺跡が集中する理由として、岩陰だけでなく水や食料資源が得やすかった可能性があげられる。というのも、カルハ山は狭い谷に雨水が集中し、岩盤の窪みに雨水が長期間保持される箇所が多い「峡谷オアシス」と言えることがこれまでの水場調査で明らかになっている(Ikeya and Kadowaki 2022)。

今年も池谷和信教授(国立民族学博物館)が水場の民族調査を継続した結果、中部旧石器後期のトール・ファラジ(Tor Faraj) 遺跡や上部旧石器初期のワディ・アガル(Wadi Aghar) 遺跡の付近に天然の岩盤窪みがあることが確認された。調査を行った8月末には水が無かったが、水がある時期には家畜の飲み水などのために、これらの水場が現代も利用されているという。

また、現在の乾燥環境下では、南ヨルダンの野生動物はとても限られているが、カルハ山では野鳥の罫猟が行われている。鳥などの小型動物の利用は、上部旧石器初期以降のホモ・サピエンスの生業を特徴づけるため、その獲得技術や食料としての有用性の参考として鳥罫猟の民族調査を行っている。罫のしくみや分布については以前にも報告したが(門脇ほか2022)、今



図6 カルハ山域の地元民が罾猟で捕らえた鳥(左がハト類、右がスナシャコ)

年の調査では実際に捕らえられた鳥の種類を確認し(図6)、その解体や調理の様子を記録することができた。

7. 新しい遺跡の探査

カルハ山から南へ4~10 km の範囲にもたくさんの岩陰が分布している。また、この一帯は Wadi Abu Sawwan のチャート産地から数 km の範囲内である。そのため、この地域にも旧石器時代の遺跡があると期待して踏査を行った。その結果、石器や土器の散布地を幾つか確認したが、そのほとんどは岩陰前の斜面における二次堆積であった。岩陰内に遺物包含層がしっかり残されている例は見つけられなかった。しかし、未踏査の岩陰がまだたくさんあるので、今後も遺跡探査を継続する予定である。

8. 紅海砂浜での貝殻採取

南ヨルダンでは、上部旧石器時代以降の遺跡から海産の貝殻を素材にした装身具が出土し、用いられる貝殻の形態には通時的な変化が認められる(木元・門脇2022; 門脇2022)。そこで、貝殻形態の選択性について参考とするために、紅海の砂浜で現生貝殻のサンプリングを行った。

その結果、466 点の貝殻が収集され、少なくとも 84 種が認められた。同定は共著者(木元菜奈子)と黒住耐二研究員(千葉県立中央博物館)が行った。その一部は、

遺跡に持ち込まれた貝殻と同種・同属であった(カニモリ類やアマオブネ類、タカラガイ類など)。その一方、主に続旧石器時代に広く流通したツノガイは、今回の現生サンプリングでは1点も見つけられなかった。

この調査と研究は、文科省科研費の新学術領域研究パレオアジア文化史学(代表: 西秋良宏、東京大学)の計画研究 A02「ホモ・サピエンスのアジア定着期における行動様式の解明」(16H06409)によって立ち上げられ、基盤研究 A「資源利用行動から探る新人社会の基盤形成史: レヴァント地方乾燥域の考古科学研究」(20H00026)の助成を受けて実施した。

■参考文献・研究発表

- Henry, D. O. 1995 *Prehistoric Cultural Ecology and Evolution: Insights from Southern Jordan*. New York, Plenum Press.
- Hirose, M. 2022 Epipaleolithic faunal exploitations in the arid southern Levant: faunal remains from the Mushabian layers of Tor Hamar, southern Jordan. Oral presentation at ICAZ-ASWA XV International meeting. 28 Nov. 28-2 Dec, 2022 at Tokyo National Research Institute for Cultural Properties.
- Ichinose, N., E. Suga, S. Kadowaki, K. Tsukada, B. Nadmid, K. Umeda, M. Nuramkhaan, S. Massadeh and D. O. Henry 2022 Petrographic and geochemical characterization of chert artifacts from Middle, Upper, and Epi-Paleolithic assemblages in the Jebel Qalkha area, southern Jordan. *Archaeometry* (Early View). doi: 10.1111/arc.12824
- Ikeya, K. and S. Kadowaki 2022 Ethno-archaeological approach to water sources and bird hunting near Paleolithic sites in the Jebel Qalkha area, southern Jordan. Poster presented at ICAZ-ASWA XV International meeting. 28 Nov. 28-2 Dec, 2022 at Tokyo National Research Institute for Cultural Properties.
- Naito, Y. I., M. Hirose, M. Belmaker, D. O. Henry, M. Osawa, T. Nakazawa, S. Habinger, P. Tung, H. Bocherens, S. Massadeh and S. Kadowaki 2022 Paleoenvironment and human hunting activity during MIS 2 in southern Jordan: isotope records of prey remains and paleosols. *Quaternary Science Reviews* 282: 107432
- 門脇誠二 2022「レヴァント地方における旧石器時代の人類の技術と行動の通時変化—最近の動向と考察—(後編)」『西アジア考古学』23巻 67-83頁 日本西アジア考古学会。
- 門脇誠二・廣瀬允人・須賀永寿・S. マサデ・D. ヘンリー 2022「ホモ・サピエンスの拡散・定着期における文化動態—南ヨルダン、カルハ山の旧石器遺跡調査(近年の研究成果)—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』28-31頁 日本西アジア考古学会。
- 木元菜奈子・門脇誠二 2022「貝殻ビーズから見る南ヨルダン終末期旧石器時代の社会ネットワーク」『日本西アジア考古学会第27回総会・大会要旨集』31-32頁 日本西アジア考古学会。